

表 克次 竹内 佐和 池原 悟 村上 仁一

鳥取大学工学部知能情報工学科

1 はじめに

日本語複文(埋め込み文)は、英語では、関係節、同格節、前置詞句などさまざまな表現に多くが訳される。これを正しく訳し分けることは、日英翻訳機械の重要な課題の一つとなっている。日本語複文の意味的構造を英語の構造と対比して文型化することによって、翻訳精度の向上につながると期待できる。

そこで本稿では、「内と外の関係」、「底の名詞を修飾する述部の意味的完結性(陳述度)」及び、「底の名詞の抽象度」に着目して複文の分類を行う。

2 日本語複文と英語表現の対応関係

ここでは、日本語複文の構造を英語の構造と対比して分類するため、「日英機械翻訳機能試験文集」³⁾(6,183文) 中に含まれる複文 432 文を対象に、対応する英語表現の分類を行った。但し、「とき」、「ため」、「こと」、「はず」、「もの」、「の」は連体修飾される名詞として働くが、後の節に対しては副詞的な修飾として働くという二面性を持つため本研究では取り扱わない。

分類の結果、図 1 に示すように、関係節 33%:同格節 8%:準動詞(分詞、不定詞、動名詞)34%:前置詞句 18%:その他 7%となった。これより、日本語複文と英語表現の違いについて、以下に示す。

- (1) 日本語の連体節は、英語では必ずしも節には訳されず、準動詞、前置詞句などに訳される場合が半分以上を占める。
- (2) 英語で節に訳される場合は、「関係節」、「同格節」のいずれかの構造となる。

関係節	同格8% 節	準動詞	前置詞	その他7%
33%		34%	18%	

節 句

図1 英語表現の種類と割合

3 文型化の考え方

前節の翻訳例を分析した結果によれば、複文に対応する英語の表現構造は、日本語側から見ると、「底の名詞」と「それを修飾する述部」の性質に強く依存している。具体的には、以下に述べるように「内と外の関係」、「底の名詞を修飾する述部の意味的完結性（陳述度）」及び、「底の名詞の抽象度」の3種類の情報が重要な要因となっていると推定される。

3.1 内と外の関係

山田¹⁾は、底の名詞(英語では先行詞に相当する)と修飾部の格関係の種類に応じて複文を分類したが、格関係を含まない複文も存在する。

そこで、寺村²⁾は、図2に示すように、底の名詞が連体節内で格関係を有するか否かに着目して、複文を「内の関係」と「外の関係」に分類した。この分類が英語の「関係節」と「同格節」に対応させるために有効であると考えられる。

猫が[(男が)さんまを焼く]男に近付いた。

内の関係

猫は[さんまを焼く匂い] (匂い) を好む。

外の関係

3.2 陳述度

英語では、主語名詞と定動詞の結び付きが「文」の単位であるという明確な形式的・客観的基準があり、それが他の一部を成すときは「節」となり、不定詞や分詞による「句」の構造と明確に区別する手立てとなる。しかし日本語では、動詞、形容詞、存在詞が言い切りの形で終ればそれで文に成り得るという最低の必要条件はあるが、文と単なる概念を表すだけの動詞についての、形式的基準は求め難い。よって“文らしさ”を表す「陳述度」の概念が、英語の「節」と「句」に対応させるために有効であると考えられる。

3.3 底の名詞の抽象度

「外の関係」において「同格節」と「前置詞句」の違いが底の名詞の抽象度および修飾部の陳述度に依存していると言える。そこで、底の名詞の抽象度および修飾部の陳述度に基づいて分類することが、英語表現

